

隠岐神社と後鳥羽天皇の墓

隠岐神社が建立されたのは 1939 年だが、詩歌と芸術において名高い後鳥羽上皇（1180–1239）の像は何百年も祀られている。天皇を退位した 3 年後の 1201 年に、後鳥羽上皇は日本三大歌集のひとつである新古今和歌集を編纂した。彼は刀づくりにも深い関心を持ち、天皇として刀剣を愛用することで、日本の刀剣制作の進歩において重要な影響を与えた。1221 年、鎌倉幕府討伐に失敗したのちに、上皇は中ノ島へと追放された。

平安時代（794–1185）初期には、隠岐諸島は朝廷で失脚した上流階級の人々の流刑地であった。暖かい気候と豊富な資源があったため、配流された人々はその場所で快適に暮らすことができた。彼らを鎮魂することは、詩人で政治家でもある菅原道真（845–903）が、みじめにも追放先の九州で亡くなってから重要視されるようになった。道真の死に続いて、一連の自然災害が首都を悩ませた。干ばつと飢饉に加えて、京都にあった皇居は繰り返し落雷を受け、複数の王子が予期せず亡くなった。亡くなった道真の怨霊がこれらの災難を引き起こしたとされている。

後鳥羽上皇はその人生の最後の 18 年を神社のすぐ北にある簡素な住居で過ごした。ここへは本殿に沿った短い小道を通って行くことができる。小道は西へと曲がり後鳥羽上皇の墓地まで続いている。上皇は死後、火葬され、その遺骨は分けられた。半分は皇室の天皇陵に納めるために京都へと運ばれ、残りはいくつかの門と石壁に囲まれたこの場所に納められた。隠岐神社が建立された際に鳥居が建てられたが、残りの石の建造物は元々この上皇陵にあったものである。後鳥羽上皇が配流されてから見張り役とお世話係を担った村上家は、石工業を営んでおり、45 世代にわたり御墓守を務め続けている。

隠岐神社は後鳥羽上皇の崩御から 700 年後に創建された。菊浮線と呼ばれるこの神社の御神紋は、後鳥羽上皇が個人的に使っていた 5 つに割った菊に基づいている。後鳥羽上皇が短歌を数多く残したことから、境内には 31 文字の短歌が書かれた看板や記念碑が数多くみられる。加藤楸邨（1905–1993）や冷泉貴実子（1947–）が敬意を払ってこの神社を参拝した。また、この神社は数多くの和歌、短歌、俳句の大会を開催している。

本殿左の倉庫には祭りの時に使われる 2 基の神輿が収められている。左側の 1 基は神社創建時にさかのぼり、右側の 1 基は江戸時代（1603–1867）からのものである。中に入っているアイテムは 5 年おきの 4 月 14 日と 10 月 14 日に行われる祭りの行列（パレード）中に使われる。

神社の北西へと続く道路の向こう側には後鳥羽院資料館があり、後鳥羽上皇の時代から島に残る工芸品を保存している。展示品には、上皇の歓迎の儀式でたった 1 度しか使われていない青銅の茶器などがある。後鳥羽上皇の遺言や彼が島で作った和歌の編纂集も資料館に保管されており、中には歌合での点数の記録や上皇が行った判詞も含まれている。また、後鳥羽上皇が刀作りの技術向上に貢献したことを踏まえて、刀鍛冶から寄付された江戸時代以降の日本刀も数多く展示されている。